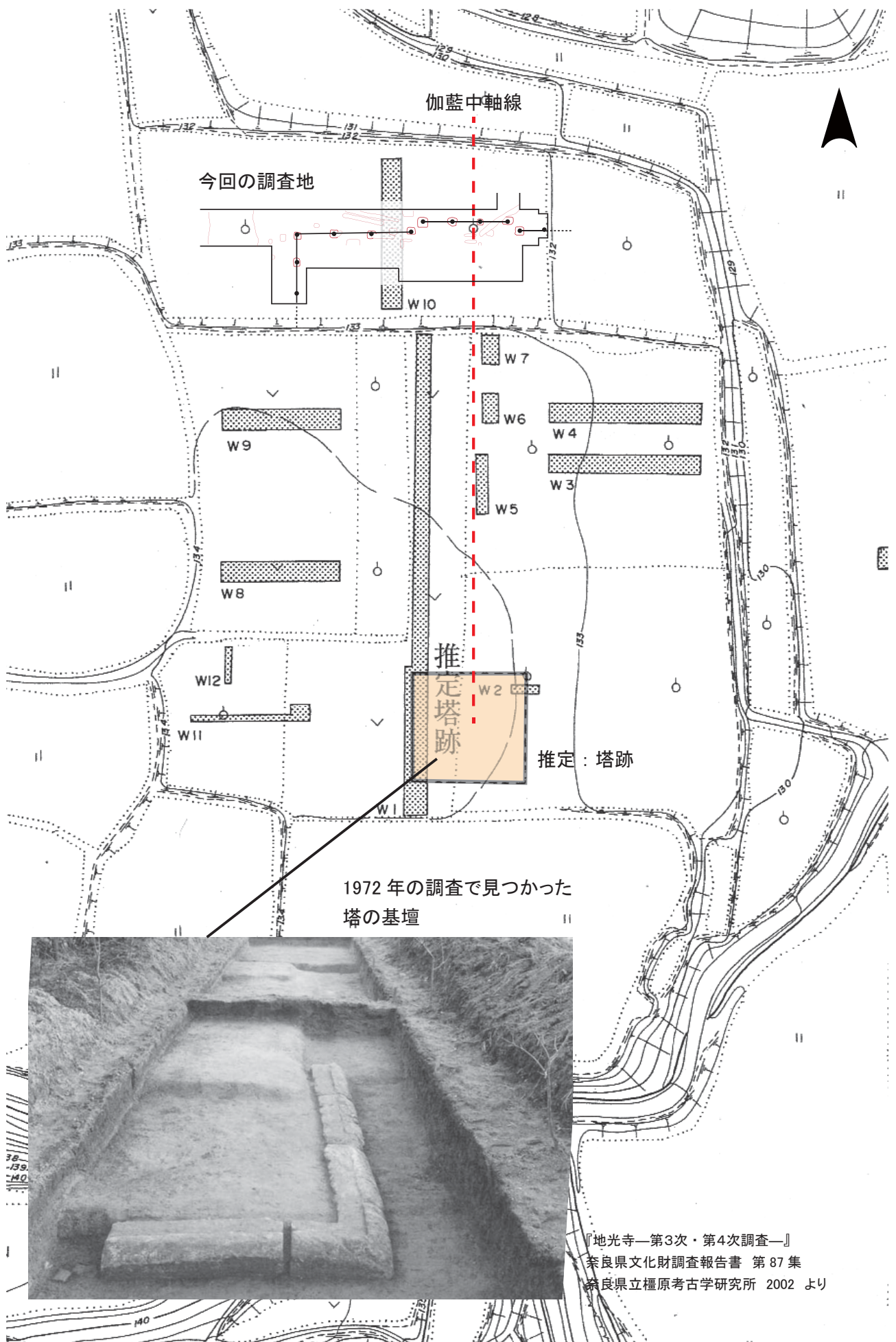


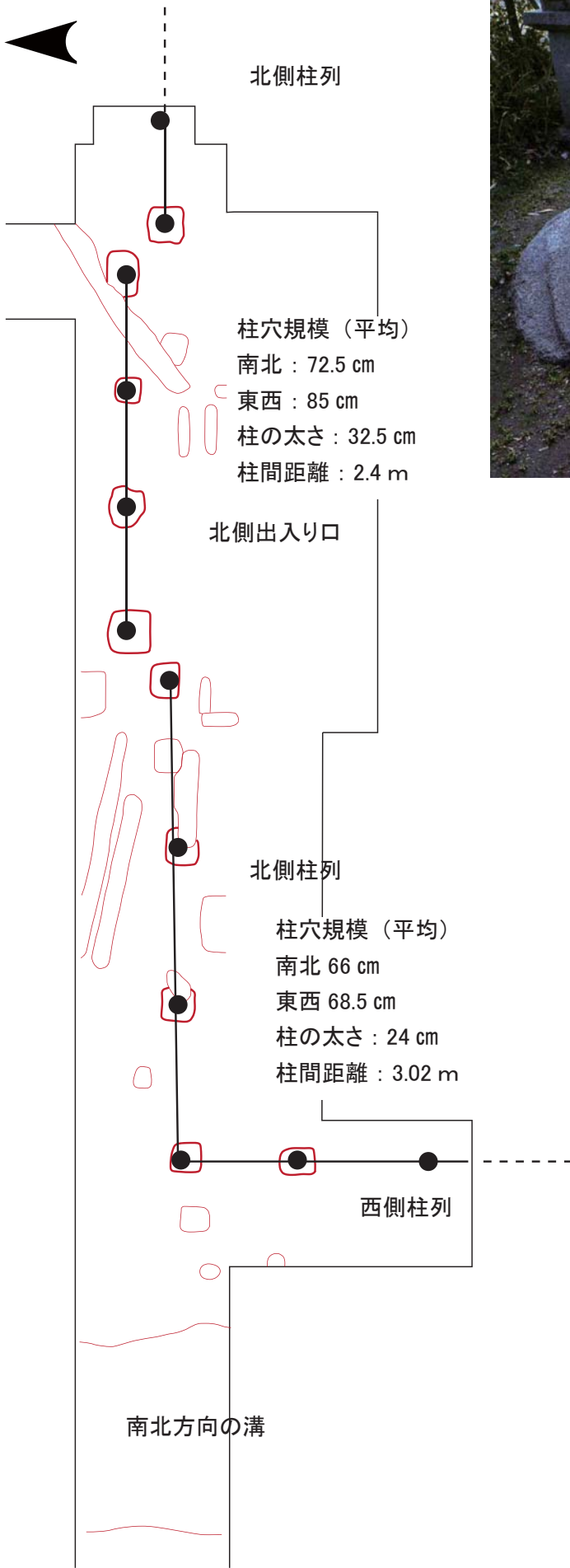
地光寺跡

—地光寺西遺跡の発掘調査について—





『地光寺—第3次・第4次調査—』
 奈良県文化財調査報告書 第87集
 奈良県立橿原考古学研究所 2002 より



脇田神社（天満宮）の地光寺跡塔心礎



地光寺跡出土
鬼面文軒丸瓦



地光寺跡出土
葡萄唐草文軒平瓦

地光寺跡 第5次発掘調査について

はじめに

二上山麓には、当麻寺や石光寺などの古代寺院が集中していますが、それらから南に離れた葛城山麓に位置するのが、「地光寺跡」です。ここは、律令時代の忍海郡内で唯一の古代寺院であり、金属加工などで活躍した技術者集団を傘下に置いた、忍海氏の氏寺として性格づけられています。

脇田神社の境内には、塔の心柱を支えた心礎があり、その周辺に、東西に二つの塔が並ぶ古代寺院（東遺跡）がありました。さらに、県道五條・香芝線（山麓線）をはさんで西の笛吹小字地光寺にも、「地光寺旧跡」の石碑があり、その北側一帯が古代寺院の遺跡（西遺跡）にあたります。

これらの遺跡の確認調査は、橿原考古学研究所によって1972年におこなわれ、これらの寺院跡を小字名から「地光寺跡」と名づけられました。東西二つの寺院は、出土瓦などから、7世紀末ごろに東遺跡がまず建立され、そして8世紀前半には西遺跡に移されたと考えられています。

この寺に使用された瓦で注目を集めたのは、珍しい「鬼面文軒丸瓦」です。鬼瓦ではなく、軒先を飾る瓦なのです。さらに、「葡萄唐草文軒平瓦」は、奈良県内で山麓地形の寺院に共通して採用された瓦です。

今回の調査の対象とした西遺跡では、以前の調査で塔跡の建物基壇とみられる遺構の一部が見つかっています。それから44年ぶりに、北端に近いところで、東西に長い畑を調査する機会をいただきました。

調査の内容

今回の調査では、ほぼ東西方向に設定した調査区の中かで、柱穴の跡や大溝、耕作の際つけられた溝、土坑などが見つかりました。

そのなかで、東西方向および南北方向にのびる柱穴の列があることがわかりました。柱穴のなかから、地光寺が建立された時期の特徴をもつ瓦が見つかっていることから、この柱穴も地光寺の建立にともなって掘削されたものであることがわかりました。

これらのことから、この柱列は、地光寺の北と西の境界をしめす、板塀といった遮蔽施設の跡であると結論付けました。西側の板塀の外側には、大きな溝が南北方向にはしっており、お寺の西側は、溝と板塀という二重の施設で区切られていたことも明らかになりました。

加えて、北側の板塀とは異なる軸で4つの柱穴があることがわかりました。この4つの柱穴の中心は、1972年の調査でみつかった塔跡から推定される伽藍（お寺を構成する建物群）の中心にほぼ重なっています。このことから、板塀とは異なるこれら4つの柱穴を、地光寺の北側出入り口（北門）を構成するものではないかと考えました。

板塀の設置は、お寺の主要な建物が完成していたことを物語るものと考えられます。

まとめ

今回の調査によって、地光寺西遺跡のお寺の範囲がどこまで広がっていたのかを考えるための、有力な成果を得ることができました。お寺の領域がどのような施設によって区切られていたかをしめす例は、奈良県下でも数少なく、地光寺のみならず、他地域の古代寺院のあり方を考える上でも重要な成果といえます。

地光寺西遺跡の調査は、今回の調査で2回目であり、お寺の全容解明にはまだまだいたっておりません。今後機会がございましたら調査を重ね、地光寺がどのような寺院であったのかを皆様とともに考えていきたいと思えます。

『地光寺跡 —地光寺西遺跡の発掘調査について—』

編集・発行 葛城市教育委員会・葛城市歴史博物館

発行日 2016年2月27日

葛城市歴史博物館 〒639-2123 奈良県葛城市忍海250番地1 TEL:0745(64)1414 FAX 0745(62)1661

※資料の内容は発行日時点の見解です。今後の検討の中で、年代等を含め、解釈が変更される可能性があります。